
悲雨と喜雨

あっしー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

悲雨と喜雨

【Nコード】

N0686S

【作者名】

あつしー

【あらすじ】

どこにでもいる普通の女性、結衣。
平凡な毎日を送っていた彼女に、梅雨の始まりの雨と共に、不思議な男との出会いが訪れます。

徐々に距離を縮めていく二人ですが、この男にはある重大な秘密があつて…

雨の出会い（前書き）

初投稿です！

温かい目で見てやってください（＾－＾）
v

雨の出会い

雨に降られるなんて、ついてない。

出かけにちゃんとチェックした天気予報では、今日一日は持つって言ったのに。どかがよ、ザーザー降ってるじゃん。せっかくおろした新しい服がびしょびしょになっちゃった。

さきもとゆい
崎本結衣。大学入学を期に上京してきてから、もう6年が経つ。

学校を卒業してからは、なんてことのない一般企業に就職した。特別得意なことも、やりたいこともなかったし、どこにでもいるOLになったことに不満は無かった。

自分自身、ものすごく平凡な人間だって分かってる。

不細工ってわけじゃないけど、どう見積もっても中の上くらいの顔だし、スタイルだって人に自慢できる程じゃない。足は結構キレイって言ってもらえるけど、意外とお腹には肉がついいてて悩みだし。

恋の経験も、そんなにたくさんあるわけじゃなかった。

高校の時に、先輩に憧れて告白したこと、大学で同級生の男の子に声をかけられたこと、

人生の恋愛における一大イベントといえば、それくらいだし。

ちなみに、どっちとも付き合ったけど、一年も経たないうちに別れてしまった。

何が原因とかじゃない、人間としてのソリが合わなかっただけ。

負け惜しみじゃないよ？だって、どっちも振ったのは私の方だもん。

とにかく、私は、どこにでもいる普通の女の子だった。普通の平均値は、もしかしたら私かもってくらい。

でも、別に後悔はひとつもなかった。むしろ、非凡で波乱万丈とかよりずっといい。

このまま、適当に会社の中で男を見繕って、寿退職とかして、平凡なお母さんにでもなって、安らかに死んでいく。

簡単に立てた人生計画だけど、多分そんなに難しいことじゃない。言ってみれば、今までで通りの私の生き方で、十分実現可能だと思う。

これが、私崎本結衣の生き方。

それはともかく、今日この雨は困ってる。

定時の5時に会社を出て、家まで歩いて30分の道のりを歩いている途中だった。

もう、サイアク。あと15分くらい降るの待ってよ。でも、私がブツブツ言うのと比例して、雨足はどんどんつよくなってきた。

さすがにヤバイと思って、傘の無い私は、とりあえず近場の店に飛び込んだ。ホントにサイアク。お天気アナの人、そこそこ美人ですきだったのに、この大外れの予想のせいで応援する気なくしちゃったよ。

ずぶ濡れの私は、ハンカチで身体を拭きながら、改めて飛び込んだ店を眺めてみた。

眺めると言っても、そんなに広さは無い。出入口のすぐ真正面からずらっと本が並んでいて、レジは一番奥。狭い店なのに、レジからは棚が死角になっちゃって、いくらでも万引きされそうなんだけど。

（古本…かな？）

試しに一冊抜き出してみると、表紙が少し黄ばんでて何となく汚いカンジがした。他の本も、背表紙からして古いし、この店は古本専門みたいだ。

「こんな本屋、あつたんだあ……」

毎日、行き帰りで前を通っていたはずなのに、全然知らなかった。普通、一回くらいは目に留まりそうなものだけだ。小さいとはいえ、この店、すつごくボロいから逆に趣があるもん。

「本、好きなんですか？」

取り出したまましげしげと本を眺めていた私は、声をかけられるまで、すぐ後ろに人が来ていることに気付かなかった。

「きゃっ……!？」

びつくりして振り向くと、そこには男の人が立っていた。背はそんなに大きくない。私より少し大きいくらいで、服装も、白いYシャツにジーンズのラフなものだった。

「すみませんね、驚かせちゃって」

私に小さく悲鳴をあげられたその人は、ちょっと苦笑いをしながら謝った。

「い、いえこちらこそ。」

「こんな寂れた本屋にわざわざ来るなんて、よっぽど本が好きなのかなと思って」

「ああ……」

男がしゃあしゃあと 寂れた なんて言うから、店の人に聞かれたらってヒヤヒヤしたけど、覗いてみたらレジには誰もいなかった。奥にでも引っ込んでるんだろう。

「私がここに入ったのは偶然です。ちょっと雨宿りしようと思って」

「そっか。確かに、今ザーザー降りだもんね」

この人も雨宿りかな？それにしても、ちっとも濡れた形跡がない。

目につくほど白い肌も、きれいに切り揃えられた黒い髪も、滴ひとつついてない。

でも、目は丸くて、柴犬みたいにかわいい顔してる。

「でも、本も好きですよ。昔からよく読んでたから」

「いいよね、読書することは。物語の中に、自分自身が入っていき
る気がしない？」

分かる。意外ってよく言われるけど、私は本が大好きだ。この人の
言う通り、登場人物の心に自分を寄せて、違う世界に旅ができるよ
うな気がして、つい夢中になって読んでしまう。

「ですよ、私もそうです。」

自分でも声が弾むのが分かった。

「私の周りで、読書が趣味なんて仔、いないんです。」

今や、読書は時代遅れの趣味なのだ。

「僕もだよ。じゃあ、やつぱりあなたに声を掛けてよかったね。お
互い、共通の仲間ができた」

ナンパの口説き文句だとしたらとくに使い古されてて最悪だけど、
柴犬顔のこの人に微笑みながら言われると、何となく悪い気はしな
い。

はい、と私も笑うと、男はそれじゃあ、と手を振ってきた。

「また、きっとここで会いましょう」

「えっ、もう帰られるんですか？だって、まだ雨やんでませんよ？」

「うん、大丈夫。帰るのは、僕じゃなくてあなただからね」

言っている意味の分からない私に、男は手に持っていた折りたたみ傘を押しつけてきた。

この人、最初から傘持ってたんだ。

「さっきよりは大分小雨になってるから、今がチャンスだよ。この雨、まだずっと降ってるみたいだし。」

男が指指す外を見てみると、確かにピークつぽかったさっきより雨足はマシだった。

「いや、でも、ダメですよ。この傘、私が持ってたちゃったら、あなたが濡れちゃうじゃないですか。」

「でも、あなたこのままだったら風邪引くかもよ？」

言われた通り、さつき濡れた衣服が肌に張り付いてきて、寒い。放つとくのは得策じゃないかも。
でも……

ためらう私に、男はしょうがないなあという風に頭を掻いた。

「じゃあ、僕が先に帰りますよ。」

えっ、と思っているうちに、言うが否や男は入口から外へ飛び出した。

「ちょっと、何してるんですか!？」

店の中から叫ぶ私に、男は、当たり前のような顔をして言った。

「これで僕も濡れちゃったから、傘なんて要らなくなったでしょ？
だから、風邪引き寸前のあなたが差せばいい」

何言ってるんのこの人、言ってることメチャクチャ。
けど……

「また、その傘返してくださいね。それじゃ」

「えっ、ちよっ…」

待つて、と言う間もなく、男は雨の中を走り去った。

「なんなのよあの人…」

お節介。店にいた私なんか無視して、自分だけ出てっちゃんえばよかったクセに。

でも…

「…ありがとう」

借りた傘を抱き締めてみた。紺の無地、地味でどこにでもある傘だけど、とても大切なものに思えた。

また、

きつと、ここで会いましょう。

その傘、返してくださいね。

名前も聞けなかった。
でも、男はそう言っていた。

また、会えるかなあ。

私は、この雨の日の不思議な出会いに、本の物語の始まりのような
ドキドキを覚えていた。

——だけど、これが悲しい物語の始まりだとは、私にはまだ知りようもなかった。

合ったタイミング

本屋で雨宿りをした、次の日。

雨は、止むことを知らないようにずっと降り続いている。

今日は、朝の天気予報を見なくなつて、傘が必要だと分かつた。

だから、ちゃんと持ってきた。私の花柄の傘と、男から借りた、紺の傘の、2本。

仕事をしているときにも、帰りのことで頭がいっぱいだつた。

また会おう、男はそう言った。でも、いつにしようとか、そんな約束全然してないし、それどころか相手の名前すら知らない。

ああ、私のバカ。せめて連絡先くらい聞いとくんだった。

一回会っただけなのに、しかも名前も知らない男のことが気になつて仕方ない。赤の他人の私に、親切にしてくれた人。メチャクチャだつたけど、私を心配してくれた。

お礼も言えてないし、…うん、そうだ、お礼。それぞれ。
なんか、私ばかりがつついて会いたいみたいだ。言い訳が欲しい。

「なーによ、結衣。ボケーっとしちゃって。あんた、何かあったの？」

「ちよっ…痛いつて真美、肩の手、のけてってば」

私の肩に全体重をもたせかけていた真美は、特に反省の色もなく、手を離すと、今度は私のデスクにどかっとな腰を下ろしてきた。

「ちよっとな真美、ジャマ！降りてよ」

真美とは同期で、入社以来なんでも話せる友達。

基本いい仔なんだけど、男好きなどころには、ちよっとなついていけない。月に何回かは合コンを開いて、未来の旦那様を探すのにいそしんでるんだもん。

（とか言っつて、その合コンには、私も何回か参加してるんだけど）

真美は、デスクの上で足を組むと、事件解決の糸口を見つけた敏腕探偵みたいに目を光らせた。

「さては結衣、男できた?! 彼氏いない歴、今まで一緒に更新してきたクセに、まさかの抜け駆け!?!」

そう。そんな風に何回も合コンを重ねているにも関わらず、真美にも私にもここ数年彼氏がいない。

アドレスを交換したり、仲良くなって食事に行ったことのある人は何人かいるけど、結局つき合うことにまではならなかった。

「残念でしたあ、違いますよーだ。あと足のけて、飯にも仕事でしょうが」

「なんだ、違うのか。ああ、彼氏欲しいなあ。なあんで、私たちは男が引つ掛かんないわけ!?!」
地球上には、数えきれないくらい男がいるってのに」

真美はそう喚くけど、何回か男の人と接してみて、私は気付いた。
多分、恋愛っていうのは
タイミングが大事なんじゃないかな。

だから、たとえお互い恋をする相手が欲しくて仕方がない人同士が出会ったとしても、上手くいかないパターンがあるんだ。…と思う。

「がつていて男探してたら、それこそ引かれちゃって無理でしょ。彼氏なんて、その内できるよ」

「いやいや、今現在いないあんたに言われても、全然説得力ないし。それに、やっぱり彼氏にするならレベル高い人の方がいいじゃん！ほら、松岡さんみたいなカッコイイ人だったら、自慢できちゃうですよ？」

マシンガンみたいな真美の言葉にちよつとうんざりしつつ、私は帰り支度を始めた。あと10分で退社時刻だ。

あの本屋に、少しでも早く立ち寄りたい気持ちでいっぱいだった。

「ねえ結衣、松岡さんって、やっぱりイイと思わない？こんな中小企業の会社のサラリーマンにしろくの、勿体ないよね」

真美の言う 松岡さん っていうのは、私と真美の上司で、ひとつ年上の25歳。

背が高く、いつもきちんと締めたネクタイとスーツがよく似合う。顔もキリッとした二枚目で、仕事にもソツがない。まさにデキル男。

「あの人は止めといた方がいいよ。競争率激しすぎ」

真美に一応釘は刺してみた。だって、モテないわけない松岡さんは、会社中の女の子の憧れで、寿退社を狙うOLの間では、誰もが彼女の座を奪おうと必死なんだもん。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0686s/>

悲雨と喜雨

2011年10月8日22時29分発行